

「教える」と「伝える」の使い分けについて

山内 博之・高橋 侑希

1. 問題意識

日本語学習者の日本語使用を考えた場合、初級学習者は日本語を口から出すだけで精一杯であり、よく似た2つの語のうち、その文脈において、どちらの方がより使用するにふさわしいか、などということを考えるゆとりはない。しかし、日本語の使用に少しゆとりのできた中級・上級の学習者たちは、よく似た2つの語の使い分けに頭を悩ますことが少なくない。

この論文では、そのような、よく似た2つの語の使い分けについて考察する。具体的には、「教える」と「伝える」の使い分けのルールを明らかにすることを目的とする。

以下は、「教える」と「伝える」の両方が使用可能な文である。なお、この論文で使用する例文は、引用であるという断りがない限り、基本的にすべて作例であり、文法性判断は山内と高橋で行った。

- (1) 秘伝のタレの作り方を弟子に (○教えた／○伝えた)。
- (2) 同窓会会場までの行き方を友人たちに (○教えて／○伝えて) おいた。
- (3) 取引先の人に連絡先を聞かれたので、営業所の電話番号を (○教えた／○伝えた)。

これらの文においては、「教える」と「伝える」の両方が使用可能であり、どちらを使っても、文意は大きくは変わらないように感じられる。しかし、以下の文においては、いずれか一方の使用が許容されていない。

- (4) 大人に英語を (○教える／×伝える) のはなかなか大変だ。
- (5) 友達に近所の人気スイーツ店を (○教えて／×伝えて) あげた。

(2)

- (6) 急いでいたので電話で用件だけを（×教えた／○伝えた）。
- (7) 鉄砲を日本に（×教えた／○伝えた）のはボルトガル人だ。

上記の(4)(5)においては「伝える」の使用が許容されず、(6)(7)においては「教える」の使用が許容されていない。どのようなルールに基づいて、「教える」と「伝える」の使用の可否が決定されているのか、この論文においては、そのルールを明らかにする。

なお、この論文における、山内と高橋の作業の分担についてであるが、まず、高橋が例文を作成して文法性判断による分析を行い、両者の使い分けのルールを概ね明らかにした。その後、山内が使い分けのルールに修正を加え、必要に応じて例文にも修正を加えた。修正の結果を高橋と協議した後、最終的に、山内が論文の形にまとめた。

2. 先行研究

本章では、先行研究について述べる。まず、「教える」の意味・用法については、森田(1989)に詳しく述べられている。しかし、森田(1989)における「教える」の意味記述は、英語の「teach」の範疇を出ていないものであるように思われる。森田(1989)においては、「教える」の意味は、まず(8)のように示され、さらに(9)のように詳しく述べられている。

- (8) 人や動物に対し、相手のまだ知らない、身につけていない事柄を知らせ、授け、訓練する。
- (9) 教える側と、教えられる側との二者関係を前提とする。授与者の側に立てば「教える」、受益者の側に立てば「教わる／習う／学ぶ」など。ただし、意味的にぴったり対応はしない。授与者は「先生、教師、教授者、師匠、調教師、コーチ」など人間であるが、「師対弟子」の直接行為のほか、「社会に出ると教えられることが大いにある」「“兎と亀”の話は人間の生き方を教えている」のように、社会、生活、話、諺、書物などが間接的に教師となることも多い。

さらに、「教える」には、「弟に秘密を教える」のような「BニCヲ教える」という構文と、「小学生を教えた経験はありますか」のような「Bヲ教える」という構文があること、また、教える相手は、「学生」「犬」などのような、学

習が可能な頭脳を持つ高等動物だけでなく、「コンピューター」のような、頭脳に相当するものを有する対象であれば「機械」などでもよい、ということなども述べられている。

しかし、いずれにしても、「教わる／習う／学ぶ」などとの対立を意識した、英語の「teach」のような意味で「教える」をとらえており、以下のような「教える」の意味を正確に記述しているとは言いがたい。

(10) 今、何時か（○教えて／×伝えて）くれる？

(5) 友達に近所の人気スイーツ店を（○教えて／×伝えて）あげた。

(10) は、文脈によっては「伝える」の使用も可能になると思われるが、今何時なのかを知りたくて尋ねる場合には、「教える」の使用のみが可となる。この(10)の「教える」は、(8)の「人や動物に対し、相手のまだ知らない、身についていない事柄を知らせ、授け、訓練する。」とは異なる意味であるように感じられるし、(9)にある「教えを受ける」というような意味合いもまったく感じられない。森田(1989)の記述は、このような点について改善が必要である。

次に、「伝える」については、森田(1989)では扱われていなかったので、国語辞典の記述を見ることにした。以下は、『明鏡国語辞典 第二版』の「伝える」の記述である。「注意」「語法」等の情報を省略して、意味記述と例文のみを(11)に示す。

- (11) ①あるものが仲立ちとなって、電気・熱・音や情報などを他方に移す。「銅線が電気を―」「空気が音を―」「風が春の息吹を―」
- ②ことばなどである内容をもった事柄を知らせる。「記者が被害の状況を―」「伝言を―」「映像で―」「皆さんに宜しくお―え下さい」
- ③(代々受け継いできて)後代・後生に残す。「弟子に秘伝を―」「伝統を未来に―」
- ④《「…と―」「…と―えられる」の形で》それが伝承や伝説に基づく情報であることを表す。「この曲はモーツァルト作曲と―えられている」
- ⑤遠く離れたところから文物をもってくる。もたらす。「ザビエルは日本にキリスト教を―えた」

(4)

(11) の記述で気になるのは、②の「ことばなどである内容をもった事柄を知らせる。」である。この記述に基づくと、次の文で「伝える」が使用できないことを説明するのが難しくなる。

(12) 彼は初心者パソコンの使い方を（○教える／×伝える）のがうまい。

(12) は、受け手が知識・技能を蓄積していくことを目論んで、受け手にパソコンに関する情報を与える、という意味の文である。得た情報によって受け手の知識や技能が蓄積されていく時には、「伝える」は使用できないのであろう。そこが「教える」との違いなのではないかと思われる。

3. 「教える」と「伝える」の使い分けのルール

前章では、森田（1989）の「教える」の記述と、『明鏡国語辞典 第二版』の「伝える」の記述を検討した。森田（1989）の「教える」の記述においては、「教わる／習う／学ぶ」などとの対立を意識した、英語の「teach」のような意味で「教える」の意味をとらえていることに問題が感じられた。また、『明鏡国語辞典 第二版』の「伝える」の記述には、得た情報によって受け手の知識や技能が蓄積されていく時には「伝える」は使用できない、という記述が不足しているように感じられた。森田（1989）と『明鏡国語辞典 第二版』を参考にしつつ、これらのことを考慮して作成した「教える」と「伝える」の使い分けのルールは、以下のとおりである。

(13) 共通点：受け手に情報を付与する。

教える：受け手に情報を付与することによって、受け手の能力が向上したり、知識が蓄積したりする場合に使用する。

伝える：受け手に情報を付与すること自体に意味があり、情報の付与によって、受け手の能力が向上したり、知識が蓄積したりすることを問題にしない場合に使用する。

以下、「教える」と「伝える」に関して筆者たちが文法性判断を行った例文を見ながら、上記ルールの妥当性を検討していく。まず、以下の例文を見ていただきたい。

- (4) 大人に英語を（○教える／×伝える）のはなかなか大変だ。
 (12) 彼は初心者パソコンの使い方を（○教える／×伝える）のがうまい。
 (14) 修論の作成に関して佐藤先生に（○教えられ／×伝えられ）たことは多い。
 (15) 犬に芸を（○教える／×伝える）のは楽しい。
 (16) 新入社員には仕事を背中で（○教える／×伝える）主義だ。
 (17) 災害に自然の厳しさを（○教えられ／×伝えられ）られた。

(4) では、「英語」に関する情報を付与することによって「大人」の能力が向上することが意図されている。(12) では、「パソコン」に関する情報を付与することによって「初心者」の能力が向上することが意図されている。(14) では、「佐藤先生」は話者の能力の向上を意図して「修論の作成」に関する情報を付与したと考えられる。(15) では、「芸」に関する、動作による情報を付与することによって「犬」の能力が向上することが意図されている。(16) では、「背中」から発せられる情報によって「新入社員」の能力が向上することが意図されている。(17) では、「災害」から情報を得ることによって「自然の厳しさ」に関する知識が蓄積されたことを意味している。上記の文においては、それぞれ、以上のように文意が解釈されることから、(13) のルールに基づき、「伝える」の使用が許容されず、「教える」の使用が許容されているのであろう。

上記の文においては、情報の付与が受け手の能力の向上や知識の蓄積に影響を与えていることが比較的明らかであった。しかし、次に挙げる文は、上記の文とはやや趣が異なる。

- (5) 友達に近所の人気スイーツ店を（○教えて／×伝えて）あげた。
 (18) お名前を（○教えて／×伝えて）いただけますか。
 (10) 今、何時か（○教えて／×伝えて）くれる？

これらの文においては、情報の受け手が元々その内容に関心があり、情報を付与される前から、すでにある程度の知識を有していたものと考えられる。(5) では、その「友達」は元々「スイーツ」好きであり、「スイーツ店」について、すでにある程度の知識を有していたのであろう。そこに、新たな「スイーツ店」の情報が付与されたことによって、知識が蓄積されたのではないか。(18) においては、受け手は、「ある人」に関する情報をすでにある程度有しており、「その人」に関する知識をさらに蓄積したいために、「名前」という情報を付与してもらえよう依頼している、という文なのであろう。(10) は、どんな文脈

(6)

で発せられた文なのかがまったくわからないが、おそらく何かをしようと思っ
ていて、そこに「時間」についての情報が必要だったのであろう。そのため、
それまでの知識に蓄積される形で、「時間」についての情報が付与されるよう
依頼している、という文なのであろう。このように考えると、一見、(13) のル
ールに反しているかのように見える文でも、実は、(13) のルールに基づいて
いるということがわかる。

以下の文は、(5) (18) (10) とは異なり、受け手が、元々知識を有していた
とは考えにくい文である。

(19) 明日会いに行くと彼に (×教えて／○伝えて) くれる？

(20) 私の名前を坂田さんに (×教えて／○伝えて) おいてください。

(21) どのお店がおいしいか美代さんに (×教えて／○伝えて) くれますか。

(19) では、「彼」は「明日会いに行く」という情報を、おそらくいきなり付
与されるのであろう。(20) も、「坂田さん」は「私の名前」という情報をいき
なり付与される文であるように読める。(21) の「美代さん」も、「どの店が
おいしいか」という情報を、おそらくいきなり付与されるのであろう。このよ
うに、(19) (20) (21) は、当該の情報がいきなり受け手に付与されるよう
に読める。そのため、受け手には元々そのような情報に関心があって知識を蓄積
しているようには感じられず、「教える」の使用が許容されないのであろう。
そして、それは、能力の向上や知識の蓄積を問題にしていなかったことにつな
がるので、「伝える」の使用は許容されるのであろう。

次に挙げる文も、(19) (20) (21) と同様、「教える」が許容されず、「伝える」
のみが許容される文である。

(6) 急いでいたので電話で用件だけを (×教えた／○伝えた)。

(22) 彼女の誕生日に思い切って愛を (×教えた／○伝えた)。

(23) 怒っているということを表情で犬に (×教える／○伝える)。

(6) では、「用件」という情報の付与によって、受け手の能力が向上したり、
知識が蓄積したりということは考えにくい。(22) についても、「愛」という情
報の付与によって、「彼女」の能力が向上したり、知識が蓄積したりというこ
とは考えにくい。(23) についても、「怒っている」という情報の付与によって、
「犬」の能力が向上したり、知識が蓄積したりということは考えにくい。つまり、

いずれの文においても、能力の向上や知識の蓄積を問題にしているとは考えにくいため、「教える」の使用が許容されず、「伝える」の使用が許容されているのであろう。

次の文は、物の付与に関係する文である。

- (7) 鉄砲を日本に (×教えた／○伝えた) のはポルトガル人だ。
 (24) この壺は家宝として子孫に (×教えて／○伝えて) いきたい逸品だ。

このように、「伝える」の目的語となるものは、情報ではなく、物でもよい。ただし、「あげる」と同じような意味で、「伝える」を使うことはできない。次の (25) を見ていただきたい。

- (25) 友達の弟にチョコレートを (○あげた／×伝えた)。

(7) の「鉄砲」は、単なる「物」ではなく、その使い方などの情報も含んだ「情報」付きの「物」である。(24) の「壺」についても、「家宝」であるという情報がついていなければ、「子孫」に「伝えていきたい」とは考えないであろう。(7) (24) においては、それぞれ「鉄砲」「壺」という「物」自体の付与ではなく、「物」に付随する「情報」の付与が重要なのである。

ここまで、本章では、「教える」か「伝える」のどちらかの使用が許容されない文を見てきた。次に、両者の使用が許容される文を見る。

- (1) 秘伝のタレの作り方を弟子に (○教えた／○伝えた)。
 (2) 同窓会会場までの行き方を友人たちに (○教えて／○伝えて) おいた。
 (3) 取引先の人に連絡先を聞かれたので、営業所の電話番号を (○教えた／○伝えた)。
 (26) SNS がいかに危険かを子供たちに (○教える／○伝える)。
 (27) 明日、何をすべきかを部下たちに (○教えた／○伝えた)。

(1) は、「弟子」の能力の向上を目論んで「秘伝のタレの作り方」という情報を付与したとも解釈できるし、「弟子」の能力の向上に主眼はなく、それまで受け継がれてきた「秘伝のタレの作り方」についての情報を「弟子」に付与すること自体に意味があるとも解釈できる。(2) は、「友人たち」が「同窓会」に関する知識を蓄積することに積極的であり、そのため、「同窓会会場までの

(8)

行き方」という情報を付与したとも解釈できるし、「友人たち」の知識の蓄積には関心はないが、幹事としての責任感などから、とりあえず「同窓会会場までの行き方」という情報を付与した、とも解釈できる。(3)は、「取引先の人」の自社に対する知識の蓄積に寄与すべく、「営業所の電話番号」という情報を付与したとも解釈できるし、「取引先の人」の知識の蓄積には無関心で、仕事だから、ただ単に自社の「営業所の電話番号」という情報を付与したとも解釈できる。

次に、(26)は、「子供たち」の「SNS」に関する知識の蓄積に寄与すべく、「SNSがいかに危険か」という情報を付与するととも解釈できるし、「子供たち」の「SNS」に関する知識の蓄積を目論むというよりは、大人としての責任感から「SNSがいかに危険か」という情報を「子供たち」に付与するととも解釈できる。(27)は、「部下たち」の能力の向上に寄与すべく、「明日、何をすべきか」という情報を付与したとも解釈できるし、「部下たち」の能力の向上を目論むのではなく、単に上司の責務として「部下たち」に「明日、何をすべきか」という情報を付与したとも解釈できる。以上のように、それぞれ2通りに解釈できることから、上記の(1)(2)(3)(26)(27)においては、「教える」と「伝える」の両者の使用が可能なのであろう。

ここまで、本章では、20余りの例文における「教える」と「伝える」の使用の可否を、(13)のルールに照らしながら説明してきた。(13)のルールは、概ね妥当なものであると判断して問題ないのではないだろうか。

なお、「伝える」には、以下のような用法もある。

(28) みなさんにもよろしく(×お教え／○お伝え)ください。

ここまで見てきた「教える」と「伝える」は、すべて「～ガ～ヲ～ニ(動詞)。」という構文を形成していた。(28)も、同様の構文なのであろうと判断できるが、しかし、適当なヲ格名詞を(28)に充当することはできない。(28)は、ヲ格名詞の存在が非常に希薄になった、「伝える」の「慣用句的用法」であると考えるのが妥当であらう。

4. 二格をとらない構文

前章で見てきた「教える」と「伝える」の例文は、基本的にすべて「～ガ～ヲ～ニ(動詞)。」という構文を形成するものであった。しかし、「教える」に

も「伝える」にも二格をとらない構文がある。

まず、「教える」が二格をとらない構文、つまり、「～ガ～ヲ（動詞）。」という構文も形成し得ることは、森田（1989）に言及がある。以下は、森田（1989）の中で示されていた、二格をとらない「教える」の例文である。

- (29) 小学生を教えた経験はありますか。
- (30) 幼い子を教えるのは世話がやける。
- (31) 人の子を教える聖職につく。

(29) を例にして考えるなら、「小学生に英語を教える」と「小学生を教える」を比較するとわかりやすい。前者の二格名詞が、後者ではヲ格名詞として表されている。

また、「伝える」も「～ガ～ヲ（動詞）。」という構文も形成し得る。「伝える」が「～ガ～ヲ（動詞）。」という構文を形成し得ることは、小泉他編（1989）で述べられており、第2章で見た『明鏡国語辞典 第二版』で言えば、(11)の①の用法が概ねそれに当たる。「～ガ～ヲ（動詞）。」という構文をとる「伝える」の例文は、以下のとおりである。

- (32) 金属は熱を（×教える／○伝える）性質を持つ。
- (33) 空気は振動を（×教える／○伝える）。
- (34) 水は、よく音を（×教える／○伝える）。

(29) (30) (31) と (32) (33) (34) は、どちらも「～ガ～ヲ（動詞）。」という構文なのであるが、ヲ格名詞の意味役割が異なっているため、「教える」と「伝える」の互換は一切不可である。

5. まとめ

本稿が明らかにした「教える」と「伝える」の使い分けのルールは、第3章で示した(13)である。(13)を以下に再掲する。

- (13) 共通点：受け手に情報を付与する。
教える：受け手に情報を付与することによって、受け手の能力が向上したり、知識が蓄積したりする場合に使用する。

伝える：受け手に情報を付与すること自体に意味があり、情報の付与によって、受け手の能力が向上したり、知識が蓄積したりすることを問題にしない場合に使用する。

「教える」と「伝える」の2語を比べると、日本語学習者にとっては、「教える」の方が身近に感じられるであろう。しかし、「教える」の意味は案外難しい。「教える」の意味は、英語の「teach」と同じであると考えられがちであるが、「名前を教えてください。」「今何時か教えてください。」などの「教える」は、英語の「teach」とは異なるものである。名前や時間を当てるテストであれば、「名前を教えてください。」「今何時か教えてください。」などという発話になるが、自らの知識を蓄積するために情報を要求する場合には、「名前を教えてください。」「今何時か教えてください。」という発話になる。「教える」の意味・用法を説明する際には、日本語教師は、(13)のルールに留意するとよいであろう。

参考文献

- 北原保雄編（2010）『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店
小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川学芸出版

（やまうち ひろゆき・実践女子大学教授）
（たかはし ゆき・実践女子大学大学院文学研究科
国文学専攻博士前期課程 2022 年度修了生）